

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20323

研究課題名（和文）がん経験者の生きがいや価値観に着目した心理的支援の効果検討：ランダム化比較試験

研究課題名（英文）Psychological support focused on cancer survivors' meaning and values in life: A randomized controlled trial

研究代表者

畑 琴音（Hata, Kotone）

早稲田大学・人間科学学術院・助教

研究者番号：60962355

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はがん経験者の生きがいや価値観に沿った豊かな生活を目指すための心理的支援の有効性を示すことを目的としていた。本研究の成果として、生きがいや価値観に沿ったプログラムの作用機序に関する研究を通して、がん経験者の活動抑制が報酬知覚を下げ、抑うつを悪化させるメカニズムを明らかにしたことが挙げられる。また、ランダム化比較試験のための介入者トレーニングマニュアル、使用するプログラム冊子、リクルートを行う患者支援団体を確定することができた。パイロット試験の出版と研究協力者の確保に困難が生じたため、症例登録までは至らなかったが、引き続きランダム化比較試験の実施を継続していく。

研究成果の学術的意義や社会的意義

がん診断直後や治療中の方への心理支援は発展してきている。一方で、がん罹患し、時間が経ってもなお抑うつ気分や不安に直面する者は多い。そのため本研究によって、がん経験者の生きがいや価値観といったポジティブな側面に着目したプログラムが開発されたことは、中長期的な療養生活を行うがん経験者への心理支援充実の一助となることが考えられる。さらに、本プログラムの作用機序である、楽しみや喜びといった報酬の知覚が低まることががん経験者の抑うつに強く影響することが認められたことで、ネガティブな認知の変容だけでなく、ポジティブな認知への着目のがん経験者の心理的苦痛の改善に寄与する可能性が示された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to demonstrate the effectiveness of psychological support for cancer survivors to aim a fulfilled life in line with their meaning in life and values. The main results of this study include the identification of the mechanisms by which activity restriction in cancer survivors lowers their environmental reward and exacerbates depression through an observational study. This examination of this model was essential to support the action mechanism of the present program. We were also able to finalize the interventionist training manual for the trial, the program booklet to be used, and the patient support group to conduct recruitment. Due to difficulties in publishing the pilot study and recruiting research participants, we were unable to reach case enrollment, but will continue to conduct the randomized controlled trial.

研究分野：臨床心理学

キーワード：Psycho-oncology Activity restriction Depression Anxiety Self-help program Values

1. 研究開始当初の背景

がんの生存率は飛躍的に改善し、がん治療の侵襲性軽減、副作用の緩和方法も発展している。そのような背景から、がんに罹患した後も趣味や仕事、友人や家族との関わりといった、人生や生きがいにとって重要な活動を保ちながら療養を継続することが可能になってきている。一方で、がんを経験した者(以下、がん経験者)が不安や抑うつ症状といった精神症状を抱えることは多く(Niedzwiedz et al, 2019)、生活の質の低下などにつながるとされている。

がん経験者を対象とした患者体験調査(厚生労働省, 2018)によれば、精神的な苦痛によって日常生活で困っていると回答した者は、全体の 30%存在することが示されている。さらに、がんに罹患した5年、10年経過してもなお、抑うつ症状を抱えることが報告されており、罹患後の年数による精神症状の違いはみられていない(Götze et al., 2020)。以上から、がんの診断を経験して何年たっても、抑うつへのケアが必要であることが伺える。

がん経験者の不安や抑うつの維持メカニズムとして、①回避的な対処による閉じこもりがちな生活、②生活の中にある小さな喜び、楽しみへの感受性低下が考えられ、この2点に着目した心理的支援の開発が有用な可能性がある。

がん経験者を対象とした心理療法の介入研究は多く実施されており、認知行動療法、問題解決療法などががん経験者の心理的苦痛軽減に有効であると示されている(e.g. Gielissen et al., 2007)。これら心理療法の多くが、がん罹患後のネガティブな思考や体験をネガティブではないものへと変容する方向でのアプローチである。しかしながら、長期的な療養生活の中で、がん体験者は体調の変動や再発への不安や心配といったネガティブ感情を抱えることは当然の反応といえる。そのため、近年はがんに関わるネガティブな心的体験はしながらも、趣味や仕事、友人や家族との関わりといった、人生の価値観や生きがいに沿った、豊かな生活を目指す心理的支援にも注目が集まっている。

本研究で開発し、効果を検討するプログラムは、がんに関連する多様なネガティブな側面(病気の捉え方や、治療への向き合い方、気分の持ちよう)の改善に着目したこれまでのプログラムとは異なり、がん経験者本人が大切にしたい生きがいや価値観に着目している。さらに、がん医療の現状を踏まえ、地域医療に根差すことを前提としたプログラム提供を目指す。

2. 研究の目的

本研究の目的は、地域を拠点とした療養をするがん経験者に対して、がん経験者の人生の価値観や生きがいに沿った生活を送ることを目指したプログラムを実施し、有効性を検討することであった。がん経験者への医療機関を中心とした心理的支援提供は広まりつつあるが、医療機関から離れた場所で療養生活を送るがん経験者への支援の体系化はなされていない。がん経験者に対する心理的支援は、精神腫瘍科といった専門外来のあるがん専門病院、もしくは精神科を受診が主たる方法である。精神科を受診するハードルは高く、心理的支援へのアクセスは容易ではない。これからのがん療養が外来中心となることを踏まえ、地域にて療養をするがん経験者を対象に、地域の患者会やプライマリケア



図1. 本研究の位置づけ

（かかりつけ医）を基盤とした心理的支援を整備することは必須である(図1)。

3. 研究の方法

(1) プログラムの背景理論に関連する研究; がん経験者における活動抑制と価値の関連背景と目的: がん経験者の大切にしている価値観や人生の目標を明確にし、それらに向かって日々を過ごしていくことは、抑うつが高まるリスク要因である活動抑制と関連する可能性がある(Tsai et al., 2017)。そこで本研究では、がん経験者の活動抑制と価値の関連性を検討することを目的とした。

対象者: がんと診断された経験のある成人

調査変数: 対象者の社会的・医学的背景、がん患者用活動抑制尺度(SIP-C-R; 畑他, 2021)、Valuing Questionnaire (VQ; 土井他, 2017)、抑うつ(PHQ-9)であった。

調査方法: インターネットリサーチ会社(マクロミル)を通して、がん診断された経験のある成人のリクルートを行った。

(2)プログラムの背景理論に関連する研究；がん経験者の活動抑制が報酬知覚を媒介し、抑うつに影響を及ぼすモデルの検討

背景と目的：がん経験者の活動抑制に関しては、抑うつを高めるリスク要因とする研究もあれば (Williamson et al., 2000) 必ずしも活動抑制単体が抑うつを高めないとする研究もある (Low & Stanton, 2015)。活動抑制が抑うつを高めるメカニズムとして、活動抑制によって日常生活の活動性が低下し、その結果としてちょっとした喜びや幸せといった報酬の知覚が低下し、抑うつを悪化させてしまうことが考えられる。そこで本研究では、がん経験者において活動抑制が顕著になると報酬知覚が低下し、結果として抑うつが高まる媒介モデルが指示されることを仮説として設定し、モデルを検討した。

対象者：がんと診断された経験のある成人

調査変数：対象者の社会的・医学的背景、がん患者用活動抑制尺度 (SIP-C-R；畑他、2021)、報酬知覚 (国里他、2011)、がんによる倦怠感 (CFS；Okuyama et al., 2000)、抑うつ (HADS；Hatta et al., 1998) であった。

調査方法：がん患者支援団体を通して、がん診断された経験のある成人のリクルートを行った。

4. 研究成果

(1)プログラムの背景理論に関連する研究；がん経験者における活動抑制と価値の関連結果と考察：

333名 (男性 220名、66.07%、女性 113名、33.93%) のがん経験者が調査の対象となった。活動抑制の合計得点と価値の尺度である VQ「前進」には有意な負の相関 ($r = -.11, p < .05$)、活動抑制の合計得点と VQ「障害」には有意な正の相関 ($r = .44, p < .001$) が見られた。また、VQ「前進」と VQ「障害」には有意な相関は見られなかった ($r = 0.02, p = n.s.$)。補足的に、がん経験者の身体状況を統制した上で、価値が活動抑制にどのような影響を及ぼすかを検討した結果、VQ「障害」は活動抑制に影響することが示された。

VQ「障害」には「日々の生活の中で自動操縦をしているかのように、意識せずに行動することが多い」「物事が予定通りに進まないとき、あきらめが早い方である」などの項目が含まれ、価値からの回避を示す項目とされている。VQ「障害」と「前進」には有意な相関が認められなかったことから、「こんなことをやりたい」、「人生を大切にしたい」といった前向きな気持ちは持ちながらも、なかなかそこに向かえないもどかしさや現実的な難しさを抱えている可能性がある。VQ「障害」は、日常生活の中の向社会的な行動の抑制につながっていることが考えられるため、どのような要因から「障害」を感じているのかなど、価値の中身の整理と実現に向かえるための具体的な計画を立てることが有用な可能性がある。

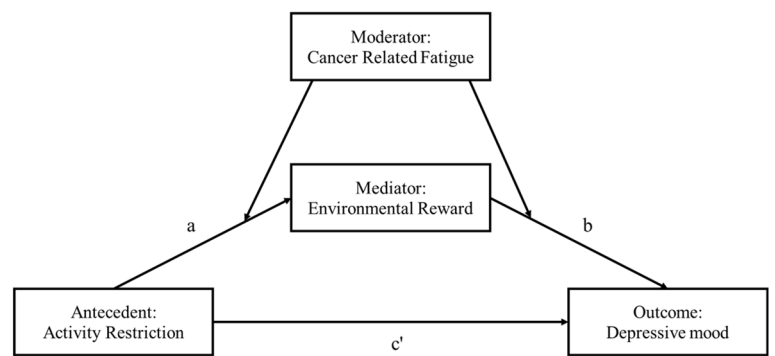
(2)プログラムの背景理論に関連する研究；がん経験者の活動抑制が報酬知覚を媒介し、抑うつに影響を及ぼすモデルの検討

結果と考察：

94名 (男性 41名、43.6%、女性 52名、55.3%) のがん経験者が対象となった。

本研究の結果、完全媒介モデルが指示され、活動抑制が高いと、報酬知覚が低下し、抑うつが高まる仮説モデルが指示された。また、がん経験者においてよく報告されるがんの倦怠感を調整変数として投入した場合にも、本モデルが指示されることがわかった。

活動抑制がみられるがん経験者を支援するうえで、喜びや楽しみをどの程度感じられているかという報酬知覚の観点に着目することの意義が示された。



	95% CI					
	a	b	c'	Indirect Effect	Lower	Upper
Moderated by Fatigue (Mean score)	-.46 **	-.68 **	-.23 *	.31 **	.10	.28
Moderated by Fatigue (Mean score - 1SD)	-.35 **	-.72 **	-.22	.25 **	.05	.27
Moderated by Fatigue (Mean score + 1SD)	-.56 **	-.65 **	-.23	.37 **	.10	.37

Note. * $p < .05$, ** $p < .01$.

95% CI = Bootstrap bias-corrected confidence interval at 95% (2000 samples).

SD = Standard Deviation.

a = The direct effect of activity restriction on perceiving reinforcement contingency (mediating variable).

b = The direct effect of perceiving reinforcement contingency (mediating variable) on depression (outcome variable).

c' = The direct effect of activity restriction on depression when perceiving reinforcement contingency is the mediator.

Fatigue was included as the moderator in all analysis.

(3) プログラムの冊子および介入者マニュアルの準備、リクルートの実施

研究成果の他に、本臨床試験で使用するプログラム冊子の準備を行った。パイロット試験を経て、プログラムの改定に伴うイラストの変更が生じたため、デザイナーに新たなイラスト制作依頼を行った。完成したイラストを元にプログラムのデザインを改訂し、対象者用と広報用に冊子の印刷を行った。また、本プログラムをがん経験者が参加する患者大会等に参加し、プログラムに関する広報を行った。また、プログラムの介入者トレーニングに向けたマニュアル作成、介入者となる心理職のリクルートを行った。

また、本研究のプログラム対象者のリクルートに向けて、がん患者支援団体とのミーティングを重ね、リクルート可能な支援団体との関係性構築を進めてきた。

(5) 本研究の成果のまとめと今後の展望

本研究課題を通して、プログラムの効果メカニズムを担保する背景理論の研究を実施することができた。また、プログラムに必要なプログラム冊子の確定や対象者のリクルート先の確保、介入者のトレーニングなどを行うことができた。一方で、新型コロナウイルスの感染対策の影響もあり、本研究の介入プログラムのリクルートやプログラム実施を行う予定であったがん患者支援団体の活動縮小やオンライン化を背景に、対象者の確保に難渋した。その結果、残念ながら臨床試験の症例登録には至らなかった。しかし、プログラム開始のための準備は整っているため、今後症例登録を開始し、ランダム化比較試験の完遂を目指して研究を進めていく予定である。

【引用文献】

- 土井理美, 坂野朝子, 武藤崇, & 坂野雄二. (2017). 日本語版 Valuing Questionnaire (VQ) の信頼性と妥当性の検証. *行動療法研究*, 43(1), 83-94.
- Gielissen, M. F. M., Verhagen, C. A. H. H. V. M., & Bleijenberg, G. (2007). Cognitive behaviour therapy for fatigued cancer survivors: long-term follow-up. *British journal of cancer*, 97(5), 612-618.
- Götze, H., Taubenheim, S., Dietz, A., Lordick, F., & Mehnert Theuerkauf, A. (2019). Fear of cancer recurrence across the survivorship trajectory: Results from a survey of adult long term cancer survivors. *Psycho Oncology*, 28, 2033-2041.
- 畑琴音・小野はるか・鈴木伸一 (2021). がん患者用活動抑制尺度改訂版 (SIP-C-R) の作成と信頼性・妥当性の検討. *総合病院精神医学*, 33(2), 170-177.
- 八田 宏之・東 あかね・八城 博子・小笹 晃太郎・林 恭平・清田 啓介...川井啓市 (1998). Hospital Anxiety and Depression Scale 日本語版の信頼性と妥当性の検討: 女性を対象とした成績. *心身医学*, 38(5), 309-315.
- 厚生労働省 (2018). 「平成 30 年度患者体験調査報告書」 Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/content/10901000/000860132.pdf> (2024 年 6 月 13 日)
- 国里愛彦・高垣耕企・岡島義・中島俊・石川信一・金井嘉宏, ... & 山脇成人. (2011). 日本語版 Environmental Reward Observation Scale (EROS) の作成と信頼性・妥当性の検討 (資料). *行動療法研究*, 37(1), 21-31.
- Low, C. A., & Stanton, A. L. (2015). Activity disruption and depressive symptoms in women living with metastatic breast cancer. *Health Psychology*, 34(1), 89.
- Niedzwiedz, C. L., Knifton, L., Robb, K. A., Katikireddi, S. V., & Smith, D. J. (2019). Depression and anxiety among people living with and beyond cancer: a growing clinical and research priority. *BMC cancer*, 19, 1-8.
- Okuyama, T., Akechi, T., Kugaya, A., Okamura, H., Shima, Y., Maruguchi, M., ... & Uchitomi, Y. (2000). Development and validation of the cancer fatigue scale: a brief, three-dimensional, self-rating scale for assessment of fatigue in cancer patients. *Journal of pain and symptom management*, 19(1), 5-14.
- Tsai, L. Y., Wang, K. L., Liang, S. Y., Tsai, J. M., & Tsay, S. L. (2017). The lived experience of gynecologic cancer survivors in Taiwan. *Journal of Nursing Research*, 25(6), 447-454.
- Williamson, G. M., Shaffer, D. R., Parmelee, P. A., a Parmelee, P., & Parmelee, P. M. (Eds.). (2000). *Physical illness and depression in older adults: A handbook of theory, research, and practice*. Springer Science & Business Media

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 畑琴音・小野はるか・鈴木伸一	4. 巻 34
2. 論文標題 がんの再発や病状悪化に関する不安・心配の対処努力尺度開発と信頼性および妥当性の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 総合病院精神医学	6. 最初と最後の頁 151-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hata Kotone, Tajima Emi, Suzuki Shin-ichi	4. 巻 5
2. 論文標題 The mediating effect of environmental reward on activity restriction and depressive mood in cancer survivors: a cross-sectional study	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Psychosocial Oncology Research & Practice	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1097/OR9.0000000000000101	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 畑琴音・田島えみ・鈴木伸一
2. 発表標題 がん経験者における活動抑制と価値との関連
3. 学会等名 第35回日本サイコオンコロジー学会総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 畑琴音・姜静愛・藤本志乃・齋藤順一・岩佐和典
2. 発表標題 慢性・身体疾患患者に対する認知行動療法
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第48回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hata, K, Tajima, E., & Suzuki, S.
2. 発表標題 references for psychological support needs upon highly distressed chronic illness patients in Japan
3. 学会等名 European Association for Behavioural and Cognitive Therapies, 52nd Annual Congress (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hata, K., Takashina, N. H., Oh, J., Santos, M., Sugita, S., Choi, K
2. 発表標題 Implementing Behavioural Activation in Ranging Contexts
3. 学会等名 10th World Congress of Cognitive and Behavioral Therapies (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------